

18. 北タイ・赤ラフ族のシェコヴェ・シャラテヴェ儀礼

1. はじめに

民族誌映像「シェコヴェ サラテヴェ 砂を盛りあずまやを作る」(西本陽一・服部一人、2012年)は、2011年04月16～19日にタイ・チェンマイ県メーアイ郡タートン区パロー村(ラフ名「パロブ」Pa-Lon-Beu、村、赤ラフ族村)でおこなわれた儀礼シェコヴェ shēk'aw, ve およびサラテヴェ sa-la-te ve の記録である。

儀礼シェコヴェとサラテヴェは、北タイ旧暦の7月の満月日を挟んで連続して行なわれる農耕儀礼である。

以下では、パロー村を例に取り、赤ラフ族の年中儀礼におけるシェコヴェ・サラテヴェ儀礼の位置を確認したのち、2011年に取材した同儀礼の過程を記述する。

2. 北タイ・赤ラフ族の年中行事

北タイに居住する赤ラフ族の、村を単位とした年中行事は、表2-1の通りである。これら年中行事は、彼らの年中の農業活動と関連している。

新年祭 hk'aw, ca' ve は、地域や村々によって時期が異なり、北タイの赤ラフ族のあいだでも1月から3月

表 18-1 北タイ・赤ラフ族の年中行事

行事	時期	農業活動との関係	主体	大戒か否か
新年祭	1月頃	農閑期	村	
盛砂祭・作亭祭	4月半ば過ぎ	畑を拓き、野焼きを終えた後	村	大戒
入安居祭	7月頃	玉蜀黍の実る頃	村	大戒
新米祭	稲穂が実る頃	稲穂の実る頃	村	
出安居祭	10月頃	稲穂の実る頃	村	大戒

出所：筆者の現地調査による

まで幅がある。だいたい8日から12日間行なわれ、その間人々は野良仕事をしないで、正月行事をして過ごす。我々が取材したパロー村では、中国正月の前に、新暦1月の満月日を基準として、日の吉兆を考慮して、正月を始める日を決めている。

新年祭が終わると、焼畑を拓き、焼き、耕起する。これらが終わり、盛砂祭と作亭祭が行なわれ、ふたつの祭りを終えて、人々は焼畑に播種(米)を行なう。もちろん農業活動はその年の天候に左右されるが、「これがおわると米を植え始める」と村人が言うように、盛砂祭と作亭祭は播種前後の農業過程を印づける役割を持っている。盛砂祭と作亭祭の日取りもまた、地域や村々によって異なるが、我々が取材したパロー村周辺では、タイのソクラン後すぐの満月日前後に催される。2011年には4月18日月曜日がこの満月日であった。

入安居祭(カオヴェ hkao-ve)は、我々が取材したパロー村周辺では、シャン族や北タイの仏教暦における入安居直前の満月日を基準に行なわれる。新暦で言えば7月半ばの時期である。カオヴェという言葉自体「入る」という意味であり、タイ系仏教徒の入安居との関連を示唆している。カオヴェは、その頃実る「玉蜀黍や南瓜の蔓を捧げる」祭りだと説明される。

新米祭(ジャスジャヴェ ca, suh' ca' ve)は、稲の収穫を感謝する祭である。新米祭は1日のみ行なわれるが、その期日は地域や村ごとに異なる。パロー村周辺の赤ラフ村では、稲穂が黄色く実り始めた時期に開催されるが、近隣のキリスト教徒ラフ村では稲が実りきったより後の時期に行なわれる。赤ラフ村では黄色くなった新米の稲穂を取って旧米に載せてご飯を炊き、キリスト教徒村では収穫した新米を炊く。同時に豚をつぶしてご馳走を作り、村人自ら食べるとともに、村外からの客たちに振る舞う。

出安居祭(オツヴェ aw, ve)は、パロー村周辺では、シャン族や北タイの仏教暦における出安居直前の満月日を基準に行なわれる。新暦で言えば10月半ばの時期である。オツヴェという言葉自体「出る」という意味であり、タイ系仏教徒の出安居との関連を示唆し

ている。オツヴェは、その頃実る「稲穂を捧げる sha^{ma} tan^{ve}」祭りだと説明される。新米祭とオツヴェは、ラフ族の主食である米の収穫時期に行なわれる。

以上が北タイの赤ラフ族の主な年中行事である。このうち、(1) シェコヴェ・シャラテヴェ、(2) カオヴェ、(3) オツヴェの3つは「大戒」(シーロー shin^{lon}) と呼ばれる。赤ラフ族の間では月に二度、新月と満月の日が「戒日」(シニ shin^{nyi}) であり、戒日には野良仕事や肉食を避けるべきとされている。年に3度ある大戒では、戒日が二日連続し、二日間安息する。一日目の戒日を「小戒日」(シーエー shin^{ch})、二日目を「大戒日」と呼び、小戒日に大きな儀礼を行ない、大戒実は通常の大戒日に安息して過ごす。大戒には、村の外からの客は殆どなく、大戒の際に行なわれる儀礼も、村落共同体が自分たちのために行なうという性格が強い。

一方で、新年祭と新米祭とは、村の外から、北タイ族などラフ以外の民族の客も多く訪れる。村人は鶏や豚をつぶしてご馳走を作り、村外からの客たちに振る舞い、自らも楽しむ。筆者のような外部者がラフ族村を訪れると、決まって言われるのは、「新年祭の時に遊びに来い」「新米祭の時に遊びに来るとよい」などの言葉である。新年祭と新米祭とは、村落共同体が自分たちのために行なう年中行事であると同時に、外部からの客を意識したものである。

3. シェコヴェ・シャラテヴェ

盛砂祭(シェコヴェ)と作亭祭(シャラテヴェ)は、満月日である大戒日を挟んで連続しておこなわれる。シェコヴェ・シャラテヴェは、赤ラフの年中行事のうち、年に3回ある「大祭」(文字通りには「大戒」と呼ばれる)のうちの1つである。赤ラフ族には年に3回「大戒」があり、通常は一日だけ戒を過ごす、「大戒」の時には2日間戒を過ごすのだと村人は説明してくれた。「戒を過ごす」とは、野良仕事、肉食、遠出、米の精白、村内での性交などを避け、「家で静かに」過ごすことである。戒日(シニ)には、このような持戒が求められるが、大戒ではそれが2日間続く。

赤ラフ族は、新月と満月の日を「戒日」として安息する。「戒日」の前日は「戒の始まる日 shin^{tan, nyi}」と呼ばれる。「戒の始まる日」の夜には、各家の祭壇と村の神殿(ホイエ haw^{yeh})の祭壇とで、蠟燭に火が点される。司祭(トボ to bo)は「戒の始まる日」

表 18-2 2011年パロー村シェコヴェ・シャラテヴェ儀礼日程

西暦	月	名称	主行事	行事
4月16日(土)		「戒の始まる日」		点蠟、夕方にイカツダヴェ
4月17日(日)		「小戒日」	盛砂祭	点蠟、朝に供飯、朝と夕方にイカツダヴェ、一部持戒
4月18日(月)	満月	「大戒日」		点蠟、朝に供飯、朝と夕方にイカツダヴェ、持戒
4月19日(火)		「戒後一日」	作亭祭	
後日		特になし		

出所：筆者の現地調査による

の夜に、自身の家の祭壇と神殿の祭壇で、蠟燭に火を点して、祈詞を唱える。宗教的に熱心な村では、「戒の始まる日」の晩に若者たちは神殿に集まって、長太鼓と鉦を打ち鳴らしながら、神(グシャ G^{ui, sha})のために踊る。「戒の始まる日」の夕方には、司祭やシャーマン(男性「タラ ta^{la}」、女性「ガシヨマ ka^{shaw} ma)たち、それに宗教的に熱心な人々が神殿の横に集まり、互いに水で手を洗い合う「イカツダヴェ i^{ka} tsuh^{da, ve}」(「水で洗い合う」という意味)の儀礼行為を行なう。

戒日の朝と晩には、各家の祭壇と神殿の祭壇とで蠟燭に火が点される。戒日の朝には、各家の祭壇と神殿の祭壇に、白いご飯が捧げられる。司祭は戒日の朝と晩に、自身の家の祭壇と神殿の祭壇とで蠟燭に火を点し、祈詞を唱える。戒日の朝と夕方には、司祭やシャーマンたち、それに宗教的に熱心な人々が神殿の横に集まり、「イカツダヴェ」を行なう。

「戒の始まる日」の晩と「戒日」は、司祭やシャーマンが安息して家にいることもあり、村内外から心身の不調や災いに悩む人々が彼らを訪れて、不幸の原因の判定や治療儀礼を頼むことが多い。「戒の始まる日」と「戒日」に司祭やシャーマンが神殿で唱える言葉には、戒日に際して神に村の安全と繁栄を願う言葉とともに、個人的な依頼者のための治療儀礼の言葉が含まれる。

年に3回の「大戒」では、「戒の始まる日」が1日と「戒日」が2日ある。戒日が2日になるとは言え、「戒の始まる日」と「戒日」(小戒日および大戒日)の過ごし方は、通常の大戒日と同様である。しかし「大戒」の際には、小戒日に大きな儀礼(盛砂祭、入安居祭、出

安居祭)が行なわれるのは、通常の戒日と違う点である。

表2-2は、2011年にパロー村で行なわれたシェコヴェとシャラテヴェの日程である。パロー村周辺の赤ラフ村は、同じ日程を取っているが、同じ赤ラフ族でも別の地域になると、別日程になる。またパロー村周辺の赤ラフ村では、大戒日を挟んでシェコヴェとシャラテヴェが続けて行なわれるが、同じ赤ラフ族でも2つの祭日が連続して行なわれないところもあるようである。

3.1 シェコヴェ (盛砂祭)

シェコヴェというラフ語は「砂を盛る」という意味である。タイ系民族の伝統正月の時期に、寺へ砂を運び、砂で仏塔を造って捧げる儀礼行為があるが、「シェコヴェ」という名称は、タイ系仏教との儀礼的な関連を示唆しているように見える。しかし、赤ラフ族の盛砂祭では、砂の仏塔を作ることはなく、「盛砂祭の木」(シェコジェ)と呼ばれる装飾された竹の根元に砂を盛るという行為が見られるのみである。

通常村人たちはシェコヴェの目的を、森に畑を拓き野焼きした際に、虫や山ネズミなどをやむを得ずに殺した罪をすすぐために行なうのだと説明する。しかし、シェコジェは実際には場所を移動しながら村の外れと神殿の裏との2カ所で行なわれ、それぞれは目的を異にする。より細かな説明によると、村はずれの儀礼の目的は、農作業に伴う殺生の罪をすすぐことであり、神殿裏の儀礼の目的は、豊かな収穫を得られるように神(グシャ、アパシャツジャ A Pa Sha⁻ Ca[^] などと呼ばれる)の「恵み」(オボオシ aw. bon aw. shin⁻)を乞うことである。

盛砂祭の木(シェコジェ sheh⁻ kaw. ceh.)とは、竹に切り目を入れて、花や細長い色紙の吹き流しをたくさん刺したものである。

儀礼の第一の場所である村外れには、家々から持ち寄られた「盛砂祭の木」が立てられる。人々ややってきて「盛砂祭の木」の根元を水で洗い、盛ってきた濡れた砂を盛る。言葉を唱える司祭が、村の内部を背にして「盛砂祭の木」に向かってしゃがむ。「盛砂祭の木」の根本で、蠟燭に火をつける。そして司祭は言葉を唱え始める。「シャーアア sha⁻-aaaa」と長く唱えると同時に、司祭と人々は手に掴んでいた白米を空に投げる。人々は、司祭の後ろ側にいる。言葉の終わりに司祭は再び「シャーアア」と長く唱え、人々は再び掴

んでいた白米を空に投げる。司祭が唱えた言葉の内容は、農作業でやむを得ずに犯してしまった殺生の罪をすすぎ給えというものである。それから人々は、神殿裏に移動する。

神殿裏には普段から、仏塔をかたどった「卒塔婆の木」(コムジェ kaw mu⁻ ceh.)や白や黄色の布の吹き流しをつけた竿(トゥジェ htu⁻ ceh.)が建てられているが、シェコヴェのこの日にはそこに数本の「盛砂祭の木」が建てられる。村外れでの儀礼を終えた人々は、今度はここに集まる。盛砂祭の木の根元に水を掛け、今年植えるべき籾米、玉蜀黍、タロイモの種を入れた容器を置く。司祭の手に水を掛けて洗い、敬意を示す者もいる。

やがて司祭が「盛砂祭の木」に向かってしゃがみ、人々は司祭の後ろに位置する。「シャーアア」という言葉と同時に人々は手に掴んだ白米を宙に投げる。司祭は「盛砂祭の木」を前に、言葉を唱える。今回の言葉は、豊かな収穫を得られるように「恵み」(オボオシ)をくださいという内容である。言葉の終わりには再び皆で「シャーアア」と唱え、白米を宙に投げる。

司祭の祈詞がおわると、神殿裏での儀礼は終わりである。人々は、盛砂祭の木に刺してあった花や色紙の吹き流しを取る。花は家に帰り、家の中の「四隅」に刺しておく、その年に豊作が得られるという(もともとこの理解と、四隅に刺すという行為は全ての人に共有されている訳ではないかもしれない)。色紙の吹き流しは、籾米、玉蜀黍の種、タロイモの種を入れた容器に乗せる。人々は、播種すべき種類を入れた容器をもって神殿に上がり、正面の祭壇前に容器を供える。司祭によると、「戒」の間供えておき、「戒」が終わると各自持ち帰ってよいということだった。実際に「作亭祭」の行なわれる「戒が終わって一日」の日の朝に、大半の容器は祭壇から持ち帰られていたし、夕方には殆どなくなっていた。

3.2 シャラテヴェ (作亭祭)

「シャラテヴェ」というラフ語は、「休憩亭を作る」という意味である。「休憩亭」とはタイ系民族の間でも見られる休憩所で、道の脇に作られて通行人や旅人が休むことが出来るようになっている。他人に休んでもらうという善行をすることで功德を積むという論理がそこにあるが、ラフの「シャラテヴェ」でも、作られる休憩亭自体は実際的であるよりも儀礼的・形式的であるが、休憩亭を作ることで、オボ aw. bon (功德)

を得ようとする類似の論理が見られる。村落単位で行なわれる「シャラテヴェ」では、村に至る道の村に近い場所に、毎年場所を変えながら、休憩亭が作られる。

村人が説明する「シャラテヴェ」の目的とは、村を囲む大きな山の霊（コネロー *hk'aw ne' lon'*）にその年に豊かな収穫が得られるように「恵み」（オボオシ *aw, bon aw, shin'*）を乞うことである。しかしよく聞くと、複数の対象に対して食物を捧げ、働きかけることが分かる。

シャラ（休憩亭）は、竹で9本の柱を立てて、作られる。九本の柱それぞれには「バラカイ *ba la k'a_ ch_*」と呼ばれる、食物を供する竹の容器が置かれる。シャラの周りには、ティ *ti_* と呼ばれる奉獻台が4つの方角それぞれに1つ作られる。さらにその周りに二カ所、無縁の浮遊霊に向けられた奉獻台が吊される。さらにその外部に一カ所、「森の獲物を乞う」ための奉獻台がもうけられる。

これらの奉獻台にはそれぞれ、ご飯、肉料理、茶葉、煙草の葉、小蠟燭一本が、各家から捧げられる。供応されるのは、無縁の浮遊霊（ピホピハ *hpi' ho' hpi' ha*）、大きな山の霊（コネロー）、神または「父なるシャツジャ」（アパシャツジャ）である。司祭はこれらの奉獻台のところで、蠟燭を点し、儀礼的な言語で、豊かな収穫が得られるように「恵み」（オボオシ）を乞う。

シャラテヴェでは、鶏や豚をつぶしてご馳走が作られる。午前中に各家では鶏や豚をつぶして、女性を中心にこれらを料理する。この間、若者を中心とした男たちは、村に至る道の脇の定められた場所に、竹と茅でシャラ（休憩亭）を作る。休憩亭と奉納台およびご馳走の準備が整った後、午後に人々はシャラの周りに集まり、儀礼が行なわれる。

それぞれの奉納台の前に司祭はしゃがみ込み、蠟燭に火をつけて、言葉を唱える。人々は司祭の前にいるべきではなく、後ろにいてはならない。祈言葉の前後には「シャーアアア」とみんなで唱え、手に掴んだ白米を宙に投げる。

司祭の祈詞がひととおり終わったところで、人々は奉納台に捧げられた食物を取り、シャラやシャラの周りで共食する。

鶏をつぶした人は、両腿の骨を合わせて、骨にある小さな穴に竹楊枝をさして、その年の収穫や家の人の健康や安全を占う。豚をつぶした人は、午前中のうちに豚の肝で占いを済ませている。占いが凶と出た人は、後日にそれを直すために儀礼を行なう。儀礼の方法は

2つで、(1) 豚をつぶしてご馳走を作り、村人に振る舞うことと (2) 竹、泥、石で奉納物（コータ）を作って神殿に奉納し、司祭やシャーマンに祈詞を唱えてもらうことであるが、どちらもこうすることによって、オボ（守護的な力）が得られるのだと言う。

しかし、2011年にパロー村で行なわれたシャラテヴェは、途中から大雨にみまわれた。司祭は仕方なく、シャラの中にとどまり、そこで蠟燭を点して、祈詞を唱えた。それが終わると、雨の中人々が奉獻台に捧げられた食物を取り、共食した。鶏の腿骨は村に持って帰られ、村で吉凶の判定がなされた。本来、数カ所で蠟燭を点して、祈詞が唱えられるべきところだが、司祭はそれを大幅に簡略化したのである。これに対して、後で村では、本来捧げられる対象それぞれの前で蠟燭が点されて、祈詞が唱えられるべきで、そうしなかったために儀礼は不完全で、後でその影響があるのではという懸念が聞かれた。村長は、その心配を司祭に伝えたが、司祭は、確かに祈詞を唱えたのはシャラの内部一カ所でのみだが、祈詞は各対象に向けられたものだったし、大雨の中皆が急かすので仕方なかったと答えた。

19. 北タイ・赤ラフ族のシャマタンヴェ儀礼

民族誌映像「シャマタンヴェ トウモロコシを捧げる」(西本陽一・服部一人、2012年)は、2011年7月13～16日に、タイ・メホンソン県パンマパ郡ナブポム区パートン村(ラフ名「パト」Pa⁻Taw、村、赤ラフ族村)でおこなわれた儀礼シャマタンヴェ sha⁻ma⁻tan⁻ve の記録である。

「シャマタンヴェ」とはラフ語で「玉蜀黍を捧げる」という意味である。儀礼が行われる頃にちょうど実った玉蜀黍を、村を代表して、「プジョン」pu⁻cawn⁻と呼ばれる司祭が、村の守護精霊に捧げて安寧と繁栄を祈る儀礼だと説明される。

儀礼シャマタンヴェはまた「カオヴェ」hkaw⁻ve(「入る」という意味のラフ語)とも呼ばれる。「カオヴェ」が行われる時期は、シャン族や北タイ族仏教徒の「入安居」の時期であり、赤ラフ族の「シャマタンヴェ」とタイ系民族の「入安居」の関わりが推測される。実際に、赤ラフ族が用いる儀礼具の中には、「コム」kaw mu⁻(「仏塔」という意味)や「トゥ」htu⁻(「旗」「吹き流し」という意味)など、タイ系民族の語彙や儀礼具との類似が見られる。

儀礼「玉蜀黍を捧げる」は、北タイの赤ラフ族の村で一般に見られるもので、別の民族誌映像で取材したタイ・チェンマイ県メーアイ郡のパロー村でも行われている。しかし、儀礼の目的とされるものは同じでも、儀礼の過程には違いがある。

パロー村を含む赤ラフ族村の多くでは、村の司祭は「トボ」to bo と呼ばれる。トボは村の中に建てられた「ホイェ」haw⁻yeh⁻の管理者であり、村を代表して、ホイェにおいて「グシャ」(G⁻ui⁻sha、神、神格)に対して祭祀をおこなう者である。「ホイェ」で精霊(ne⁻)に対する祭祀はおこなわれることはないため、ホイェはグシャに対する祭祀に特化した祭祀場だと言える。ホイェがない赤ラフ村も少なくはないが、その場合、広めに作られたトボの自宅が、ホイェの代わりになっている。

ところがパト村を含む、メホンソン県の赤ラフ族の一部では、違った祭祀構造を取っている。村の祭司は「プジョン」(寺に住む管理者を意味するシャン語に由

来)と呼ばれる。プジョンは、村の上方の藪の中に作られた「ジヨム」caw⁻meun⁻(町の守護主を意味するシャン語に由来)という村の守護精霊に対して、村を代表して、村の安寧と繁栄のために祭祀を行なう者である。パト村のプジョンが言うように、ジヨムは「偉大な山の精霊」(hk⁻aw ne⁻ lon⁻)で、村を司る精霊である。

パト村型とパロー村型の祭祀体系には、顕著な違いがある。村を司る超自然的存在は、前者においては「偉大な山の精霊」であり、村を見下ろす藪の中に建てられた祭壇で祀られる。一方、後者においては「グシャ」(神、神格)であり、村の内部に作られた「ホイェ」において祀られる。つまり、前者において、村を司るのは「精霊」であり、村の外部の「森」hch⁻pu⁻hk⁻aw と呼ばれる領域で祀られるのに対して、後者において、村を司るのは「神」であり、村の内部、つまり人間の住む領域ににおいて祀られる。「精霊」と「神」という祭祀対象の違いは、村の外側と内側という祭祀場所の違いに対応している。

パト村型の祭祀体系は、中国雲南のラフ族において見られる。中国のラフ族のあいだは「ジヨム」とは呼ばれないが、村の上方に作られた祭祀場所が、村の安寧と繁栄のための祭祀場所となっている。しかし、中国のラフ族の村祭祀で祀られる対象は、時には「精霊」、「山の精霊」、「グシャ」とさまざまに言われる。一般に、祀られる対象が何かについて、村人はあまり考えたことがない様子である。村祭祀の場所も「焼香場」sha tu⁻kui⁻、「山神」sha⁻sheu⁻(漢語「山神」の借用)、「村の上方の山神」hk⁻a⁻u⁻sha⁻sheu⁻などいろいろに呼ばれ、決まった名称はない。(さらに言えば、中国のラフ族の多くでは、蠟燭を点すことでなく、線香を点すことが祭祀の中心実践である)。

興味深いことに、パロー村を含む北タイ・赤ラフ族村の住民たちは、自分たちもかつて「カウパ」(hk⁻a⁻u⁻pa⁻、「村の上方の祭壇」)で村祭祀を行っていたと語る。当時、カウパで祀っていたのは「偉大な精霊」ne⁻lon⁻や「偉大な山の精霊」だった。しかし当時祀っていた対象は「荒ぶる精霊」ne⁻hai⁻ve で、しばしば村人が意識せず犯した小さな間違いに対して、「虎

表 19-1 2011 年パト村における「シャマタンヴェ」儀礼過程

<p>一日目 (2011年07月13日)</p> <p>夜、プジョンが家の祭壇で点蠟する。</p>
<p>二日目 (2011年07月14日) 大戒日 shin⁻lon⁻</p> <p>村の人々が玉蜀黍、白米、蠟燭、塩をもってプジョンの家に来る。プジョンの家の祭壇に玉蜀黍と蠟燭を供え、用意されている大きな容器に、玉蜀黍、白米、蠟燭、塩を入れる。</p> <p>この年は玉蜀黍を植えるのが遅れて、シャマタンヴェ（玉蜀黍を捧げる儀礼）の日となっても、大きな玉蜀黍はほとんどなかった。本来玉蜀黍が多ければ、プジョンの家の祭壇だけでなく、他の村人の家の祭壇にも、玉蜀黍と蠟燭を供えて回るのだという。</p> <p>午後遅く、プジョン夫妻が、村人たちがもってきた供物をもって、ジョム（村の上方にある祭壇）へ登る。プジョンが供物をジョムに捧げて、言葉を唱える。</p> <p>プジョンの家では、朝と昼とにプジョンの妻がご飯と水とを家の祭壇に供える。夜はプジョンが家の祭壇に蠟燭を点して、言葉を唱える。</p>
<p>三日目 (2011年07月15日) 大戒日、満月日、タイではアサハラプチャーの日</p> <p>村の人々が午後からそれぞれの家で奉納物hkaw⁻tan⁻を作り始める。オブ (aw, hpeu、竹で編んだ容器) に白布、白米、蠟燭、お金を入れて、プジョンの家の祭壇に供える。</p> <p>プジョンの家では、朝と昼とに、プジョンの妻が家の祭壇にご飯と水を捧げる。</p> <p>夜は、プジョンが、村人たちが奉納物を捧げた家の祭壇に、蠟燭を点して、言葉を唱える。</p> <p>プジョンは、夜の家の祭壇での点蠟が終わった後で、家に来ていた人々に蠟燭によるマッサージ治療を施した。</p>
<p>四日目 (2011年07月16日) 戒後一日</p> <p>朝から村の人々がプジョンのところに、前日に供えてあった奉納物を取りに来る。実際には、奉納物に刺してあった、紙の人型と糸の付いた一本の竹を取って帰る。プジョンと糸を結び合う。家に帰って、家の人々と持って帰ってきた糸を結び合う。紙の人型は、家の壁の刺しておく。</p> <p>プジョンは、前の晩の夢見にしたがって、人々にさまざまな診断を告げる。夢見は、グシャ (G⁻ui, sha、神) が夢で教えてくれたものだという。</p>

が囓む」la⁻che, ve などの災いがもたらされたと言われる。その後、ラフ族の偉大な指導者によって、「カウパ」は廃止され、代わりに村の中に「ホイェ」を建てて、精霊でなくグシャに対して祭祀を行なうようになったと語られる (西本 2008)。

本映像は、北タイの赤ラフ族において数少なくなった「ジョム」祭祀方式による「シャマタンヴェ」儀礼の記録である。

以下に、2011 年に 07 月に筆者が観察した同儀礼の

進行過程を記す。その後、プジョンなど村人へのインタビュー資料を挙げておく。

資料 19-1 (インタビュー) パト村の司祭プジョン (男性、50 歳代?)・その妻 (女性・50 歳代?)、ジョム (caw, meun⁻) 村上方の藪にある祭壇) での祭祀後にシャマタンヴェについて、2011 年 07 月 14 日

ジョムは、私たちが病気がちだったり、家畜の具合が悪いときに、そこに行ってお願いをすると、治してくれます。村人たちが供物を私のところにもってくれば、私がそれをもって行って、ジョムに捧げます。すると、耕作していても、怪我をしたりしません。無事で、たくさんの収穫が得られるようにどうぞ見守ってくださいとお願いするのです。皆が、村全体が幸せであるように祈るのです。私たち人間は、ジョム、つまり、山の主、偉大な精霊のもとで暮らしているので、それに向かって語るのです。豊かな実りが得られるための恵みもまた、ジョムがくださるのです。恵みをください、悪いことは祓ってくださいとお願いします。よいことのみをくださいとお願いします。私たち人間には家族がいて、子供たちがいます。子供たちがお腹いっぱい食べられますようにと祈ります。

村の人々は、私 (プジョン) のところをお願いに来ます。そして、私が村人全員を代表して、ジョムにお願いします。するべき時期、祭の時には、元気で仕事ができますようにと、お願いするのです。

(筆者) いつでもジョムのところに行くわけではないのですか?

違います。大祭 (大戒、shin⁻lon⁻) の時にだけ、行きます。一年、皆、病気になることなく、死ぬことがないようにとお願いします。年老いて寿命になったのでなければ死なないようにと、お願いします。

(筆者) さっき捧げた玉蜀黍は、村全体のものですか?

村全体のものです。各世帯ひとペアずつ供したものです。蠟燭もひとペア供します。白米と塩も少々供します。村全体のために、私がそれらを持って行って、村人全員の安寧と繁栄を祈るのです。ジョムに供して、皆が幸せでありますようにと、恵みを乞うのです。悪いことがないようにと、悪いものはお祓いくださいと唱えるのです。よいことはすべてくださるようにと唱えるのです。

(筆者) ラフ族にもジョムをもつグループと持たないグループがありますか?

森の中のジョムに供物を捧げない人たちは、村の中の家に供します。村の中にホイェ (haw^ˈ yeh^ˈ、神殿) を作って、そして、私と同じような、祈祷者がいます。村の中で言葉を唱えるところは違いますが、トボという司祭がいて、ホイェという神殿を作っています。供物はホイェに供するのです。捧げる場所が違っていても、同じことをしているのです。私たちの場合、村の中では、玉蜀黍などでなく、コタ (hkaw^ˈ tan^ˈ) 竹などで作った奉納品) を捧げることになっています。

(筆者) どうしてやり方が違うのですか？

彼らは新しいやり方を作って、それに従っています。私たちのやり方は、最初の昔からのもので、代々受け継がれてきたやり方です。しかし、どちらもラフ族、ラフニ族 (赤ラフ族) であることに違いはありません。向こうはラフニ族でも、集団のやり方を用います。私たちは、集団のやり方でなく、古くからのやり方を用います。集団のやり方というのは、新しいやり方のことです。彼らには、司祭やシャーマンがたくさんいます。私たちの場合、グシャ (神) が降りなければ、言葉を唱えることは出来ません。私たちは代々こうしてやってきたのです。私たちの村では、私しか言葉を唱えることは出来ません。私の父も言葉を唱える人 (祈祷者) でしたし、父が死んだら、私が神に選ばれました。拒むことは出来ません。私が死ねば、また誰かが選ばれて、つとめることになります。そういう風になっているのです。

資料 19-2 (インタビュー) パト村の夫婦 (男女、30 歳代?) プジョンの家に入れる供え物 hkaw^ˈ tan^ˈ について、2011 年 07 月 15 日

こうすると健康で、飢えることがない。こうするオヒ (aw, hi^ˈ、しきたり) です。昔からしてきたことです。これはオプ (aw, hpeu^ˈ、蓮) と言います。挿してあるのはオヴィ (aw, ve^ˈ、花) と言います。これは人型を作っています。私たちの姿にして、私たちの代わりにします。

蝋燭を中に入れます。糸は、後日 (プジョンの祈祷が終わったら)、手首に結び合います。こうやって。こうするとよい、健康でいられます。グシャ (G^ˈui sha、神) のガムケ (ga mvuh hkehn、糸) と言います。白米も入れます。白米は、私たちが働いて作ったものを神に捧げるのです。大祭 (大戒) の祭には、神に捧げ物をします。蝋燭もまた神に捧げるためのものです。蝋燭はプジョンが、彼の家の祭壇で点して、祈祷する

のに使います。白布も、神に捧げるものです。お金も入れます。お金はプジョンのものになります。プジョンは、私たちが健康でいられるようにしてくれ、悪いものを祓ってくれます。あなた (筆者のこと) も、したいなら、一緒にお金を捧げてもいいですよ。そうすると、オボ (aw, bon、恵み) が得られます。あなたも恵みを得、私も恵みを得ます。一緒に捧げましょう。

こういうふうに捧げ物をするのは、毎週でなく、年に 2、3 回、大祭 (大戒) の時だけです。年に 3 回です。今回は「玉蜀黍を捧げる」sha^ˈ ma^ˈ tan^ˈ ve お祭り、前回は「砂を盛る」sheh^ˈ kaw, ve お祭り、このあとには「稲穂を捧げる」ca, nu^ˈ tan^ˈ ve お祭りがあります。神に捧げます。ラフ族の重要な慣習です。その後には、新年祭があります。その時には餅を作ります。餅をジョムと他の人々の家の祭壇に捧げます。こうして奉納品を作ってお金を入れることを、「コタを作る」hkaw^ˈ tan^ˈ te ve と言います。コタを作ると、オボ (aw, bon、恵み) が得られます。健康でいられます。たくさんの収穫が得られ、お金がたくさん得られます。

夜になると、(プジョンが)蝋燭を点して祈祷します。天上にいるグシャ (神) に祈ります。神は私たちに恵みを授けてくれます。すると私たちは健康でいられ、お金もたくさん得られますし、食べ物もたくさん得られます。こういう奉納品は全世帯がつくれます。そしてプジョンの家に持って行きます。村には 50 余りの世帯がありますが、やらない家はわずかです。やらない家はないのではないのでしょうか。シャン族にもタイ族にも同じような慣習があります。

資料 19-3 (インタビュー) パト村の夫婦 (男女、30 歳代?) 紙の人型について、2011 年 07 月 15 日

(今夜プジョンが祈祷をしてくれたあと) 明日はこれ (人型と糸の付いた竹の棒) を (プジョンのところからそれぞれの家に) 持ち帰ります。そして、家人と糸を結び合います。オヴィ (花) のついた竹の棒を持ち帰り、家に置いておきます (壁に挿しておきます)。家にも今までのもの (竹の棒) がたくさん残っています。

資料 19-4 (インタビュー) パト村民 A (男性、50 歳代?) と村民 B (男性、40 歳代?) アムケを結び合う行為について、2011 年 07 月 16 日

A ラフはこうやって、アムケ (聖糸) を互いに結び合う。

B 長寿や健康を祈って、年長者は年少者からオボ（恵み）を受け取り、年少者は年長者からオボを受けに来る。そうやってオボをもらい合うのだ。

A 聖糸をつけていると、森にいる悪霊も近づいてこられない。聖糸をつけているのが分かると、悪さをしに来られないのだ。

B こうやるのだ。我々ラフニ(赤ラフ)族の慣習だ。

A アムケ（聖糸）がないと、森の邪悪なものにやられる。